様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年３月２４日現在

機関番号：３４４２８
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０６９９
研究課題名（和文）　後白河院政と中世王権の研究

研究課題名（英文）　The Research of Go-Sirakawa Insei and Medieval Royal Authority

研究代表者
美川　圭（MIKAWA KEI）
摂南大学・外国語学部・教授
研究者番号：20212227

研究成果の概要（和文）：

後白河院政は、平氏との提携によって確立した。そのために、平氏が中心的な役割をはたした日宋貿易との関係がうまれる。後白河院は王家の傍流であったので、その権威確立のために、蓮華王院宝蔵を重要視した。日宋貿易は、その収蔵品収集にも、大きな役割をはたした。また、七条町という京都最大の商工業地域との関係も重視して、京都の南部に拠点をもうけた。しかし、平家との提携が破綻すると、後白河院政は停止され、本格的な平氏政権がうまれた。平氏政権は福原京へ遷都し、日宋貿易との直結をめざした。だが、源平内乱のなかで平氏は没落し､後白河院政は平氏によって焼亡した東大寺再建を通じて、その権威回復をはかることに成功する。

研究成果の概要（英文）：

Go-Shirakawa insei established by the partnership and the Taira. Therefore, Taira played a central role, produce the relation to the Song dynasty. Go-Shirakawa was a faction of the dynasty, so important for the establishment of the authority, the Rengeouin. The Song dynasty trade its artefacts collection, also played a major role. Also had bases in the southern part of Kyoto focused on relation to Shichijo-Machi that Kyoto's biggest industrial region. Go-Shirakawa insei stops failing of the Heike and alliances, but authentic spur his regime was born. Ping's administration and capital to fukuhara-Kyō, aimed at the direct connection with the Song dynasty. But Go-Shirakawa insei succeed in measuring recovery its authority through the reconstruction of Todaiji Temple was burned by the Taira, Taira is collapsing in the Genpei civil war.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	700，000	210，000	910，000
２０１０年度	500，000	150，000	650，000
２０１１年度	500，000	150，000	650，000
年度			
年度			
総　計	1，700，000	510，000	2，210，000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：後白河院政・平氏政権・法住寺殿・蓮華王院宝蔵・日宋貿易・東大寺再建

１．研究開始当初の背景

（１）院政の研究を深める中で、鳥羽や白河地区と平安京との関係を解明していた。

（２）後白河院政期の法住寺殿、六波羅、福原などの平安京外延部、周辺の中世都市についても研究を深める必要性があった。

（３）出版社から依頼をうけて、一般読者向けの単著として『後白河天皇』および『院政と中世都市京都』の原稿執筆および執筆準備を進めており、そのための学術調査が必要であった。

２．研究の目的

（１）研究の全体構想は、日本の中世王権の具体像を、朝廷の政治やその制度、文化、経済基盤、都市構造の中から解明することである。

（２）後白河院政の政治過程を、武家政権、すなわち平氏政権と鎌倉幕府との関係の中で考察することである。

（３）京都・福原京、あるいは鎌倉という中世都市の構造と相互関係の側面から研究を深化させることである。

３．研究の方法

（１）後白河院の生誕からその島での政治的な位置づけを明確にしつつ、王家と摂関家、朝廷と平氏政権、朝廷と鎌倉幕府の関係を、後白河院の立場を定点として検討する。

（２）後白河院の院御所がおかれた法住寺殿、およびそこに併設された蓮華王院、蓮華王院の宝蔵がもつ歴史的意味、文化史上の後白河院について研究を進める。

（３）法住寺殿を含めた京都と福原京との関係、鎌倉との関係を、都市論的な視角から研究する。

（４）具体的な方法は、後白河院政期の文献史料、とくに記録史料を博捜し、最近の研究を再検討することになる。

（５）考古学・建築史学・日本文学・美術史学など、関連書分野の研究成果をできるかぎりとりいれる。

（６）また、都市と王権の関係を比較史的な方法で研究するため、海外出張を行う。

４．研究成果

（１）保元の乱後の混乱した状況の中で、信西を中心に大内裏復興事業が進められた。その目的は、即位儀礼をはじめとする王権儀礼を整備することであった。そのため、大内裏でも、儀礼の出席者の視覚を意識した建造物の復興が優先されたことが明らかとなっている。

（２）そのような研究状況をふまえ、王権の所在する京都の都市的な変化を中心に位置づけて、研究を進めた。その際に重視したのは、鳥羽殿において確立した王家の「権門都市」がどのように京都との関わりをもち、その後の展開を示したかという点である。

（３）最近ＪＲ京都駅周辺での考古学的発掘によって、八条院周辺の実態がしだいにあきらかとなっている。八条院という女院は後白河天皇の異母妹であるが、王家の大半の荘園を父鳥羽院から継承した。そのために、王権の中心が京都の八条周辺に移動し、王権に結びつこうという勢力も、八条周辺に拠点をもうけた。

（４）後白河自身が、譲位後、八条に近い鴨川左岸の法住寺殿を拠点としたのである。また、八条は七条町という京都最大の商工業地域と隣接し、交通・流通の拠点であった。

（５）後白河院政は平清盛との提携関係を明確化することによって確立するが、その際に平氏が中心に展開しつつあった日宋貿易との関係をもつことになった。

（６）後白河院は、宇治平等院や鳥羽勝光明

院の宝蔵を模して、院御所法住寺殿内の蓮華王院に宝蔵を建立した。宇治や鳥羽の宝蔵は、摂関家や王家（天皇家）の権威を確立するために重要な意味をもっていた。

（７）王家の主流とみなされず、その権威に問題のあった後白河院は、蓮華王院宝蔵に大きな意味をもたせようとつとめた。それは後白河の「王権」にとって要ともいうべき重要性をもっていた。

（８）後白河は、藤原頼通や信西などの漢籍蒐集の影響も受け、目を中国との関係に向けていた。すでに、前代から摂関家、王家ともに、中国からの一切経輸入などを通じて、その権力の荘厳化を試みていた。後白河はその動きを加速させる。

（９）その際に重要だったのが、早くから日宋貿易に注目していた平家、とくに清盛との提携であった。平家は大宰府との関係を強化することを通じて、日宋貿易の掌握につとめていた。

（１０）後白河は重源や栄西などの入宋をはたした僧侶たちとの結びつきを強化していた。清盛や重源・栄西なども後白河との関係強化は、その活動に有利となった。蓮華王院宝蔵と日宋貿易との関係が、このようにかなり密接であったことが判明した。

（１１）延暦寺と興福寺の強訴に対する後白河と平家の対応の相違、鹿ヶ谷事件における後白河と平家の対立が寺社問題とどのように関係するかについて検討した。

（１２）嘉応元年（１１６９）の延暦寺強訴において後白河が屈服した理由は、平家の総帥である清盛が延暦寺との衝突を回避しようとしたためであった。

（１３）承安３年（１１７３）の興福寺強訴においては、後白河は興福寺およびそれに加担した東大寺の末寺含む荘園の没収という強硬手段をとることに成功する。これは、平家が摂関家領押領問題に関係して、摂関家と深い関係にある興福寺と対立していたため、軍事的に強硬であったためである。

（１４）また、この背景には承安元年（１１７１）に高倉天皇の母建春門院のはたらきによって、清盛の娘徳子が入内し、後白河と平家との関係が深まったことも一因である。

（１５）しかし、その建春門院が安元２年（１１７６）に死去する。後白河の寵愛をうけていた建春門院は、清盛の妻時子の妹であり、中宮徳子の母であったから、後白河と平家との関係に亀裂がうまれるきっかけとなった。

（１６）安元３年（１１７７）におきた延暦寺強訴では、後白河は天台座主明雲を逮捕し還俗させて伊豆に配流するが、僧徒に身柄をうばわれた。

（１７）後白河は延暦寺攻撃を平家に命ずるが、その混乱のなかでおそらく院近臣による清盛暗殺計画を疑った平家は、藤原成親や西光らの逮捕にふみきった。これが鹿ヶ谷事件である。

（１８）こうして、後白河と平家との提携関係は破綻する。保元平治の乱以後、王家に包摂されていた平家が、軍事権門として自立する。その変化が、この時期の後白河と平家との関係に大きな影響をあたえていたことが、はっきりわかる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①□　美川圭、後白河院政と文化・外交－蓮華王院宝蔵をめぐって－、立命館文学、査読無、624 巻、2012、
②□　美川圭、橋本義彦『平安貴族社会の研究』をどう読んできたか、日本史研究、査読無、591、2011、pp. 23-pp. 32
③□　美川圭、書評・山田邦和著『京都都市史の研究』、歴史評論、査読無、736、2011、pp. 86-pp. 91

〔学会発表〕（計３件）

①　美川圭、市沢著書から見た鎌倉期政治史の現状と課題、大阪歴史科学協議会、2012 年３月 11 日、クレオ大阪中央
②　美川圭、中世前期の京都、中世都市研究会、2010 年９月５日、平泉温泉元湯ホテル武蔵坊
③　美川圭、書評・鋤柄俊夫『中世京都の軌跡－道長と義満をつなぐ首都のかたち－』、平安京・京都研究集会、2010 年２月 28 日、機関紙会館（京都）

〔図書〕（計１件）
美川圭、吉川弘文館、恒久の都　平安京、2010、pp.183-pp.210

６．研究組織

(1)研究代表者
美川　圭　(MIKAWA KEI)

研究者番号：20212227

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：